

資料紹介：染織資料Ⅴ—風呂敷（包み物・掛け物・被り物）—

與那嶺一子¹⁾

Material Note: The V Textile item - “Furosiki” wrapper, headgear covers -

Ichiko YONAMINE

はじめに

包み物、掛け物、被り物に使われた方形布帛を、私達は「風呂敷」と呼んでいる。当博物館には、このような用途の方形布帛が53点収蔵されている。

これらの資料は、「びんがた風呂敷と南蛮襲展」（1973年／26点出品）、特別展「筒引びんがたと型紙展」（1974年／20点程出品）と特別展「包むころふろしき展」（平成10年開催／10会場巡回／13点出品）における一般公開以外に、まとめて紹介されたことはない。

風呂敷と呼ばれる布帛は、筒描きによる染め物で、円形旋回型に模様構成されたものを思い浮かべがちだが、実は、素材、技法、模様など多様であり当館所蔵資料を整理し考察してみた。

沖縄における風呂敷について

当館所蔵資料の報告に入る前に風呂敷と呼ばれる方形布帛の概要を述べておきたい。

我が国において、「風呂敷」という言葉は、江戸期（天和から正徳／1681～1715）に風呂の敷物から「物を包む方形の布帛」を意味するようになった（注1）。包む方形の布帛は、被る用途や掛ける用途の布帛と曖昧な関係にあり、次第に、それらを含めた意味を持つようになる。

では、沖縄でどのように呼ばれていたのだろうか。また、いつ頃から使われるようになったのだろうか。

沖縄で物を包む様子を伝えた絵画がいくつかある。最も古いのは、歴代王の肖像を描いた「御後絵」である（注2）。国王の肖像の後ろ右側に包み物を持つ者が描かれている。御後絵は王の歿後に描かれ、何度か控え（写しか）の描き替えが行われている。次に冊封使の記録『中山伝信録』（1719年）がある（写真1）。女性の頭上運搬が4例描かれているが、その内、3例が包み物である。その次に、絵画表現で確認される

のは、近世末から明治以後と時代が下る。その頃、琉球風俗を描いたものに様々な包み方や被る様子が描かれている（写真2・3・4・5）。



写真1）中山伝信録より女集図部分



写真2）沖縄風姿画全より頭上運搬の様子：左
写真3）旅姿女人図より肩掛け運搬の様子：右



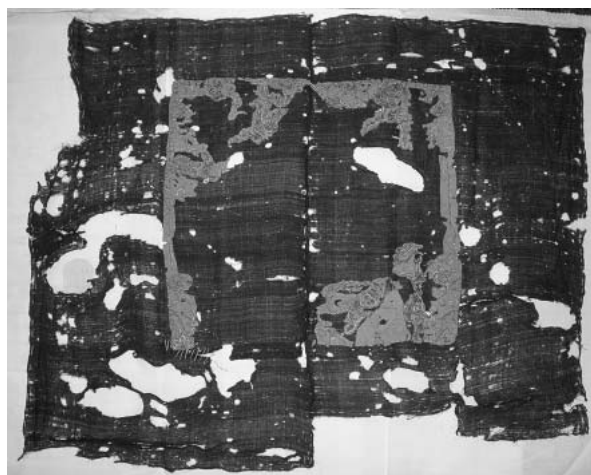
写真4）八重山蔵元絵師画稿集より被る1（頭巾として）：右
写真5）八重山蔵元絵師画稿集より被る2（作業用として）：左
※ 写真4、5は石垣市立八重山博物館蔵

¹⁾ 沖縄県立博物館・美術館 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1

Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006 Japan.

〔語源〕

国王の冠や御唐衣裳を包んだ物に「御襦褌」(注11)がある。正倉院の御物を包んだ裏・褌・褌(注1)のような紐付きの布帛だったのではないと思われるが、沖繩での呼称も含め詳細はよく分からない。



—70—

〔風呂敷の始まり〕

包む、掛ける、被る用途の布帛が、いつか頃から使われていたか、という問題は、生活と密接な問題であるにも関わらず、風俗を示す絵画や史料が少ないため、時代を遡り断定するのは難しい。

史料や実物資料を年代順に並べると下記の通りとなる。

- 年代不詳 伊平屋阿母加那志の遺品「刺繍を貼付した方形布」
- 年代不詳 尚円王御後絵に包み物を持つ人物が描かれる
- 1711年 「辻うちこい」「うちこい」「平坂」(『混効験集』)
- 1719年 「女集図」(包み物頭上運搬図／『中山伝信録』)
- 1762年 「上布を紺地に染め、梅の折枝に色取したる、随分古風なる染方也。」(『大島筆記』／1762年の漂流者からの聞き取り)
- 1720～1747か 澤岬掟親雲上(1747(乾隆12)年歿)『風呂敷型手本帖』(写真9)を描く
- 年代不詳 包み物「御襦袢」、掛け物「御辻」(『下庫理公事について 諸役向勤方心得書』)
- 1870年 「美辻壺枚鏡赤地金入錦台水色紗」「平坂壺枚水色花さや御紋付」(『玉御殿御道帳』)



写真9)『風呂敷型手本帖』／沖縄県立芸術大学蔵

伊平屋阿母加那志の遺品の方形布は、尚円(在位1470～1476年)からの下賜品と伝えられるが、拝領の時期が史料で確認することができない。

年代が明らかな事柄をみると、1700年代の初めには「辻うちこい」、御辻が使われている。

仮に、阿母加那志の方形布が、尚真王の下賜品だとするなら、御辻は1500年頃から近年まで、士族や神女達の間で、儀礼などに使われていたことになる。

また、『大島筆記』や沢岬家に伝わる『風呂敷型手本帖』(3冊／沖縄県立芸術大学蔵)から、1700年代の後半には、現在の紅型ウチクイと同様の筒描きがあったことがわかる。

琉球における筒描きによる風呂敷の登場は、江戸における風呂敷の普及(1700年代)と、密接に関連していると思われるが、ここでは提案に留めておきたい。

〔風呂敷の用途〕

これまで何度も述べたように、方形布帛には、包み物、掛け物、被り物の用途がある。

包み物は、様々な運搬方法と関連がある。近世から近代にかけて描かれた風俗図には、頭上、肩掛などの例がみられるが、頭上運搬が最も多い(注12・13)。

掛け物は、細長い盆(バキタルブン・チリデー)、婚礼行列で運ばれるハザマキヌシ(帕入れ)を覆う(注5・9)。

包む場合でも、掛ける場合でも、婚礼祝い、清明祭や拝所巡りの場合の重箱包みなどは「祝いウチュクイ」と言われていた(城間榮喜〈県指定無形文化財保持者〉談／注9)。

方形布帛を被り物とする例は、組踊りや祭り等の芸能の場面でよくみられる。このような被り物に使われた紅型風呂敷は「踊りウチュクイ」と言われると、城間が述べている(注9)。同様の使い方は組踊りなどでもみられ、1838(道光18)年の組踊台本には「頭巾」と記されている(注10)。

八重山では、女性が方形布帛を被り物とする例が多くみられる。日常の場では、野良仕事で遠方に出かける場合に使われた。ハレの場では、葬式、喪中、結婚式、また、浜下りなどの行事で出かける際に使われた(注5)。



写真10) パキトルブンを包む（資料は喜宝院蒐集館蔵）

〔筒描きの染め方〕

風呂敷には、織り、染め、或いは刺繍によって、模様が施されている。当館所蔵の風呂敷の多くは、筒描きと呼ばれる紅型の技法で染められており、資料の概要をつかむために、ここで、筒描きの染め方を簡単に示しておく。

布は縦に縫い合わせ、布の断ち目は三つ折り縫いにて始末を行う。竹を十字に組み、それに布を掛けて四隅を張り、立てかけたり、平らに置いたりして描く作業を行う。この道具はユミ（弓）または、ウチクイユミと呼ばれている（注9・14）。布の縫い接ぎ方については、〔仕立て方（縫い方）〕を参照されたい。

下絵は木炭で描くが、地色の薄いもの（黄色地等）は、下絵を描かず、直接、糊で描くこともある（注9）。

糊を引く道具は糊袋（ヌイブクロ）等と呼ばれ、厚手の木綿が円錐状に縫い合わせ、細くなった布先には竹の管（竹口／ダキグチ）を結びつける（注9・8・14）。竹口が、大小あることは、実物資料の描線からも明らかである。銅製の筒先も使われており、それは竹口に対して金口（カニグチ）と呼ばれる（注9・14）。戦後は葉莢などが利用された。

筒描き用の糊は、糯米5に対して、糠5の割合で作るが、模様の線が描きやすいのと、植物染料の滲みを防止するため、型染より糯米が多く粘りのある糊を使う。また、裏の模様が描きやすいように、糊に藍花等を入れ、色を薄くつける（注9）。

糊で模様を描き終わると、型染と同様に色を染める。染材は、昭和初期まで、次のようなものが使われている（注9・14・15・16・17）。色は顔料と染料に分

けて表示した。

赤系の色：朱・丹・正臙脂／蘇枋（正臙脂の代用として）

黄系の色：石黄・黄土／福木・鬱金・楊梅（フクギと混ぜて使用）・槐花（フクギと混ぜて使用）

青系の色：群青（やんしい）・洋青（きんべろ・べれんす）・藍蠟／藍

その他：油煙・墨・胡粉（水粉）／五倍子

色差しの後、模様部分に糊伏せし、地染めが行われる。藍の場合は、布を畳んで藍甕に入れて染める。黄色の場合は、刷毛による地引き染めとなる（注8・9・14）。

この技法は、鎌倉芳太郎、芹沢銈介、岡村吉衛門らの調査（大正～昭和14年頃）と城間榮喜からの聞き書きを参考にまとめたが、最も古い実物資料（1759年製の幕〈久米島〉）と比較しても、殆ど大きな違いはない。

所蔵品の概要

ここで紹介する当館のコレクションは、53点で、その内訳は、寄贈12点、購入38点、移管2点、学芸資料2点である。

特筆すべき事柄を年表でまとめた。（ ）内は点数である

1951年 城間榮喜より購入（1）

1952年 八重山から購入・民藝関係者から寄贈（4）

1953年 首里より購入（収集元は八重山など多岐に渡る）（9）東恩納博物館から（1）

1955年 京都より購入（1）・東京より購入（2）

1959年 東京より購入（3）、東京より購入（12）

1975～77年 城間榮喜、知念積弘から作品を購入（4）

1980年 井伊文子より寄贈（1）

1981年 横浜より購入（1）

1983年 那覇より購入（2）

1988年 ブラジルの移民一世より寄贈（2）

1994年 京都より寄贈（2）沖縄市より寄贈（1）

1997年 画家樋口富麻呂収集品の寄贈（4）

2000年 旧沖縄館資料が移管（2）※城間榮喜作品

当館のコレクションの大半は、1959年までに、収集されており、八重山から購入したものと、戦前に沖縄を離れた資料を買い戻したものに分かれる。

1975年の復帰後、県指定無形文化財「びん型」の

保持者である城間榮喜、知念積弘両氏から作品を購入している（No.4342・4496・4656・4657）。王国時代から続く紅型宗家の伝統的な技を残すこと、これは当時の収集方針でもあった。海洋博覧会記念公園にあった沖縄館が収集した城間の作品も、2000年沖縄館の廃館に伴い、当館に移管された（No.16751・16752）。

小麦粉の袋を再利用した風呂敷（写真11）が2点（No.14108・14109）。あり、戦後、染められたものである。その他、1951年に受け入れたNo.220も染めるための布の張り方が先の2点と同じであり、同時期に城間が染めたものと思われる。



写真11) 小麦粉の袋を利用した風呂敷（部分）

所蔵品には、戦前、調査に訪れた民藝関係者、画家などから寄贈を受けたものもある（No.474・15906・15907・15908・15909）。ブラジル移民一世が嫁入りに持参した筒描きの風呂敷（No.13127・13128）も寄贈された。

資料No.6276は、尚家22代当主の姉に当たる井伊文子からの寄贈である。

資料整理の方法とその考察

当館の所蔵品は、写真撮影を行い、採寸（全体、布巾）、織り密度の計測を行い、比較分析し、下記のことを確認できた。データ整理の結果は、別紙の資料一覧に記載したので参照されたい。

なお、写真撮影に当たっては、布目の縦を優先して布帛の天、地を判断した。

また、布帛全体の寸法は、布帛で物を包み結んだことにより、かなり伸縮があるため、最大と最小を示した。布巾も同様にした。織りの密度は、1 cm間

における経糸、緯糸の本数である。

資料名称は現在台帳に記載されているとおりとした。

〔加飾技法〕

方形布帛には、タティシイジウツパイ（木綿経縞）、フズリウツパイ（木綿紺地経緯縞）（写真12）、カナイウツパイ（苧麻紅型）の三種類があったと言われる（注5）。これ以外に、伊是名島や久米島に残る、刺繍や緞子裂による御辻もある。

当館には、筒描きによる染物が殆どで、残念ながら、経縞模様や紺模様、刺繍等によるものは収蔵されていない。

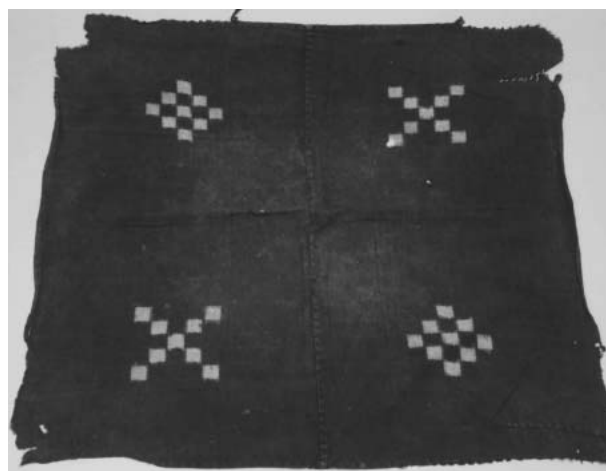


写真12) フズリウツパイ（国立民族学博物館蔵）

染織品は、先染、後染で分けられるが、先染の織物は1例あり（No.14138）、紺地格子縞模様に縫取織が施されている。経浮花織が織られた地域（現沖縄市知花）で使われていたものである。

後染は、筒描きによるもの、型染によるもの（No.1921・6276・学芸02）、筒描きと型染の併用がある。筒描き、型染めともに、多色の紅型と藍と墨による藍型がある。併用の場合は、布の中央に鶴亀や紋（家番）が型染めされている。筒描き、型染めともに、殆ど両面染めだが、いく例か片面染めがみられる（No.220・1932・学芸02）。

〔用途〕

風呂敷の用途には、包み物、掛け物、被り物としての用途があり、用途と布帛の形、種類に明快な境

界はない。伊是名の名嘉家に伝わる刺繍を貼付した方形布（写真6）は、本来は掛け物であったが、包み物として使われていた跡が残っている。当館が所蔵する風呂敷もこれらの用途に合わせ、柔軟に使用されたと思われる。

風呂敷は、ほぼ正方形の布帛が多いが、布一枚で長方形のもの（No.1924・15909）があり、これは、チリデー、またはバギトルブンと呼ばれる細長い盆に掛けるものである。No.1924は藍型、No.15909は多色の紅型で、藍型は法事用、多色は慶事用と言われる。

資料の殆どは、風呂敷として織り、染めが施されたものだが、No.6276・学芸02は、別用途に染められたものを縫い直し、方形布を仕立てたものである。どのように使用したのかは不明である。

No.14138は、花織の二巾に赤い縁をつけたもので、祭りの際の頭巾として被る用途に使用された。

大きさが160～180cmのものが数点あり、このような大風呂敷は、布団や衣裳箱（櫃）を包んだといわれる（注18・19）。

No.404は風呂敷の四隅に紐が付いているが、包んで結んだ形跡がないことから、幕のように、壁の掛け物として使ったのではないかと思われる。また、No.1597は、布帛の上部に6.5cmの棒通しが作られており、この風呂敷も壁等の掛け物であったと思われる。

〔素材と織密度〕

風呂敷となる素材は、苧麻、芭蕉、木綿、絹である。

〈苧麻〉

経1cm間の織密度は、10～12本（現在の箒目で5ヨミ）が26例と最も多く、14～16本が7例、18本2例となる。5ヨミの布は、王国時代では、貢納布の白下布（カナイヌヌ）にあたる（注5）。

No.4496は、経糸を木綿に使った混紡（ゲンボウ）である。

〈芭蕉〉

No.4342の繊維素材は芭蕉である。この資料は1975年に製作された、新しい作品だが、伊平屋阿母嘉那志の方形布には苧麻製、芭蕉製、両方あり、古くから苧麻と同様に、風呂敷の素材として使われていたようである。

〈木綿〉

経糸の密度は16～32本まであり、20本が4例ある。

木綿の風呂敷には、終戦後、小麦粉の袋を基布としたものが2点、（No.14108・14109）あり、その内、No.14108の裏には「Baiker」の文字とパンの絵がうっすらと見える（写真11）。この2例以外に、染め技法が似ており、当時のものと思われるものが1点（No.220）ある。

その他は、金巾（かなきん）と呼ばれていた輸入の広幅木綿布である。

〈絹〉

No.学芸01は、平地綾紋で、花唐草の丸紋が帛の一部に織り出されている。経糸の織密度は60本で、江戸立等の献上品であった「白花紗綾」に当たるとと思われる（注19）。同様の帛が、尚家の衣装（那覇市蔵）や神女の衣装（久米島君南風等）等に使われており、参考までに、下記に示しておく。

- 1 絹薄茶平織地綾織紋上衣（久米島君南風／注20）
- 2 絹緑地綾織上衣（久米島・平田家蔵／注20）
- 3 絹浅地綾織上衣（久米島・ミンダシガミ／注20）
- 4 絹薄茶地綾織胴衣（久米島・屋慶名家蔵／注20）
- 5 絹浅地綾織胴衣・ハカマ（久米島・上江洲家蔵／注20）
- 6 絹緑地紗綾胴衣（久米島・上江洲家蔵／注20）
- 7 ドギン（奄美大島・大和家に伝来／東京国立博物館蔵／

注21）

- 8 紅色地龍瑞宝珠瑞雲文様紅型絹袷衣裳（尚家旧蔵／那覇市蔵／注22）
- 9 絹黄色地梅桜楓雪輪手鞠文様紅型袷衣裳（財）海洋博覧会記公園管理財団蔵／注23）

〔風呂敷の大きさと布巾、剥ぎ枚数〕

風呂敷は、二巾、三巾等あり、三巾は布団などを包むに用いたといわれる（注19・8）。

当館の風呂敷は、100cm以下の小さなものから、200cmに及ぶものまである。また、布巾は26cm～95cmまで様々あり、一巾といっても、かなり違いがある。

布巾は、①30cm以下、②35～36cm、③40cm前後、④50cm前後、⑤78cm前後、⑥90cm程度に分けられる。35～40cm前後が多く、巾78cm以上の布帛は金巾で沖縄で織られたものではないとみてよい。

巾が35、40、50cmの布をそれぞれ、2枚、3枚接いでみると次の大きさになる。

No.	布巾	剥ぎ数	全体巾
1	35 cm	2 枚	70 cm以下
2	35 cm	3 枚	105 cm以下
3	40 cm	2 枚	80 cm以下
4	40 cm	3 枚	120 cm以下
5	50 cm	2 枚	100 cm以下
6	50 cm	3 枚	150 cm以下

この表で理解できるように、風呂敷は100cm以下（小）、100～120cm（中）、150cm以上（大）の大きさに分かれる。また、35cm巾布の3枚繋ぎと50cm巾布の2枚繋ぎは同じ大きさになり、布の剥ぎ枚数の多さで風呂敷の大きさは判断できないという事が分かった。

180cmを超える大風呂敷3点（No.504・4342・4496・学芸02）のうち、No.4342・4496は県指定無形文化財「びん型」の保持者であった城間榮喜、知念積弘が作品として製作したもので、実生活で使用したものではない。

風呂敷の布帛の大きさと用途は密接な関係があり、小さい物は盆の掛け物や頭巾、頬被りの被り物として使われている。それより大きい中程度の風呂敷は盆等の包み物として、大は衣装櫃などの包み物として使われる。

〔仕立て方（縫い方）〕

風呂敷は布一枚の物もあるが、殆どは2枚から5枚の布を縫い接ぎ仕立てられている。布の接ぎ方には、次の4つのパターンがある。

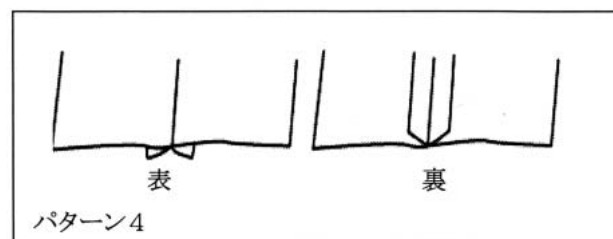
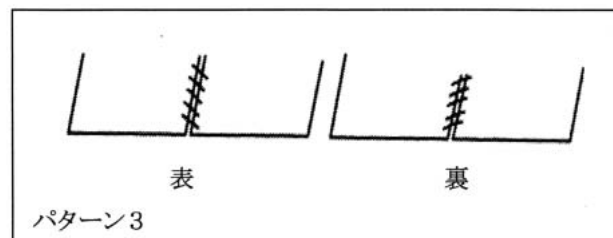
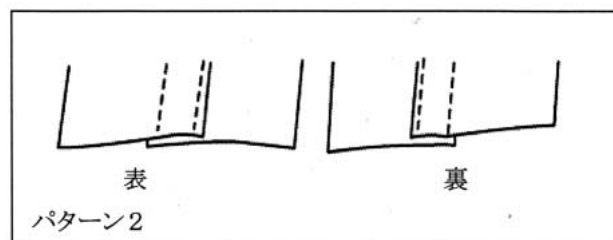
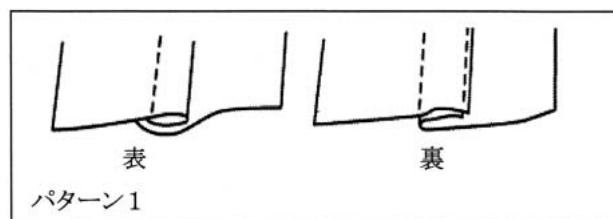
- ① パターン1（表：並縫いの糸目が一列、裏：並縫いの糸目が二列）
- ② パターン2（表：並縫いの糸目が2列、裏：並縫いの糸目が二列）
- ③ パターン3（かがりによるもの）
- ④ パターン4（裏の縫い代を綴じないもの）

筒描きの風呂敷は殆どパターン1で仕立てられている。筒描きで藍の地染めを施す場合、仕立てを解き、一枚に縫い繋ぎ、藍染めをされていると言われるが（注8）、縫い糸をみると、仕立てを解いた跡が殆どみられず、そのまま、小さく畳み、藍甕に浸けて染めたことが縫い糸から確認できた。

パターン2は4例。その内、3例は1976・1977年の制作である。

パターン3は4例、3例は、パターン2と同様に1970年代の作品である。これらの風呂敷は、筒描き、色差しの後に、仕立てを解き、地染めの後に、縫い接いだと思われる。ただし、このかがり縫いでは、包む・被る用途に使うことができず、鑑賞用に仕立ててものではないかと思われる。

また、パターン4は4例。2例はパターン1とパターン4両方の縫い方がみられ、元々パターン1で縫われていたが、仕立て直しを行った時に、パターン4で仕立てたのではないかと思われる。



〔模様構成と地色〕

No.14138の縫取織の頭巾以外は、紅型であり、その模様構成をみると次のような事がわかった。

型染による3例のうち、2例（No.6276・学芸02）は別用途の布を解いて、方形の布に仕立てたもので、以前の用途は今の所分らないが、いずれも、衣装模様であった可能性がある。No.1923はその布素材が、

着物とするには荒めであるところから、包む、掛ける等の用途を意識して制作されたものと思われる。この風呂敷の模様構成も衣装に使うことのできるものである。

筒描きの風呂敷の主題は、松竹梅、牡丹唐草、菊、桜、梅、菖蒲、鉄線唐草で、その内、松竹梅、牡丹が多い。沢岬家の『風呂敷型手本帖』(写真9)には、葵、椿、萩模様もみられる。

構成は円形旋回タイプである。これには次の2例がある。始まりの無い円形と、植物の根と先が描かれる、始まりのある円形(№504・1918・1921・15909)である。沢岬家の手本帖三冊に残っている図案33例中、タイプ2の構成は22例みられた。しかし、現存する筒描きの風呂敷には、その作例が少ない。当館の所蔵品だけで断定はできないが、完全円形の模様構成が時代が下ると好まれたという事も考えられる。

タイプ2には、熨斗で包んだものと、紐で根を結んだ2例がある。

筒描きの中央には、模様の入るものと無いものがある。模様は鶴亀か、屋番と言われる紋になる。紋なし、あるいは鶴亀紋は、屋番を持たない者が使ったと城間の談話が残っている(注7)。沢岬家の手本帖の図案にも中央に丸く円が描かれ「番」と書かれたものが2例ある。

当館所蔵品の紋は全て布に対して正面付けされており、このような紋付は、大和における掛け物によくみられ、包み物の場合は、斜め付けされる(注25)。沖縄の筒描き風呂敷にみられる、紋付けから、沖縄における風呂敷利用の最初は、掛け物だったのではないと思われる。

斜め付けの例は、当館には所蔵されていないが、№15906は円形旋回の松竹梅模様の外に紋が入っており、包む用途を意識した模様構成となっている。那覇市所蔵の貝氏福地家伝世品に№15906と同様に中央に鶴亀、模様円の外に紋を入れた構成の作例がある。また、福地家伝世品には紋が斜め付けの珍しい作例が2例みられる(注20)。

家番が紋付けされた資料は19例あるが、尚家と御殿と呼ばれる有力士族の紋以外は、どの家が使っていたものか、断定するのは難しい。

№514・1925については中央の紋が意図的に消されているが、その意味は不明である。

鶴亀の丸模様には、横向きに型置きされたものがある。おそらく、模様付けの際に、布の縦横はさほど意識されるものではなかったのではないかと思われる。

地色は、紺地、黄色地、緑地、水色地とあるが、当館の黄色地の風呂敷は戦後に制作されたものである。

昭和14年の民藝調査では、「黄色は尚家御用」「ふかじ、あさじの藍染めを常とする」と報告されている(注14)。

ちなみに、沢岬家の手本帖(写真9)には、水色地(「水色地」)、緑地(「おーさ地」)、黒地(「黒地」)の着色図が残っている。()内は手本帖の端書きの墨書内容である。

おわりに

風呂敷について、これまで曖昧で、よく分からなかったことが、いくつか確認できたので、ここにまとめてみた。

素材は、苧麻製を思い浮かべがちだが、絹、木綿、芭蕉などあり、沖縄で織られた布もあれば、舶載品を使ったものもある。また、緋、縞、花織などの織物、筒描き、型染、刺繍など沖縄の染織品がみられる一方、舶載された花紗綾や緞子裂などもある。

方形布帛の仕立て方は、パターン1が多く、縫い合わされた布帛は、縦横を気にせずに、染められていた。

筒描きの場合、模様に色差しの後、布は解かれずに、ウチクイユミに張ったまま地引き染めされるか、畳んで藍甕に浸けるかの二つの方法がある。地染めの際に布を解き、地染め後に仕立て直すと聞いていたが、その例が少ないことが分かった。また、筒描きは、基本的に両面染である。

屋番や鶴亀文などが、正面付けであることから、掛け物としての図柄が包み物にも移行し、近年になり福地家の例のような斜め付けがあらわれるようになったと思われる。「ウチクイ」の語源を考えるうえで興味深い答えが得られた。

資料を整理するに辺り、宮平真由美が撮影を行い、採寸は一部豊村さとみが行った。また、布の仕立て方については、仲地フミ氏よりご教示いただいた。記してお礼申しあげる。

文中、敬称は略した。

参考文献

- 注1) 竹村昭彦『風呂敷』(株)日貿出版 平成6年／三瓶葉子「風呂敷の移り変わり」『包むころ 風呂敷』清翠会 平成8年
- 注2) 鎌倉芳太郎『沖縄文化の遺宝』(株)岩波書店1982年
- 注3) 池宮正治『琉球古語辞典 混効験集の研究』第一書房 1995年
- 注4) 宮良泰平『続八重山方言の素性』昭和54年
- 注5) 宮城文『八重山生活誌』昭和47年
- 注6) 「下庫理公事について 諸役向勤方心得書 算欠 / 御物方 巳日番」『那覇市史 資料篇第1巻10 琉球資料(上)』平成元年 那覇市役所
- 注7) 「玉御殿御道具帳」(同治九年／1870年)『伊是名銘蒔家の旧藏品および史料の解説書』伊是名村教育委員会 平成19年
- 注8) 芹澤銑介「「かたちき」と「ぬいひち」」『工藝』日本民藝協会 昭和14年
- 注9) 渡名喜明「筒描きの紅型」『日本の染織14 筒描染』泰琉社
- 注10) 伊波普猷『稿註 琉球戯曲集』※道光18年の台本
- 注11) 「下庫理公事について 諸役向勤方心得書 算欠 / 唐御衣裳方 丑日番」『那覇市史 資料篇第1巻10 琉球資料(上)』平成元年 那覇市役所
- 注12) 『八重山蔵元絵師画稿集』石垣市立八重山博物館 平成元年
- 注13) 比嘉華山「琉球風俗画帖」(沖縄県立博物館・美術館蔵)
- 注14) 芹澤銑介『琉球の形附』日本民藝協会 昭和18年
- 注15) 鎌倉芳太郎「技術編」『古琉球紅型 第二期』京都書院 1971年
- 注16) 岡村吉右衛門『琉球古紅型 上』有秀堂 昭和43年
- 注17) 渡名喜明「紅型の型置きから仕上げまで一城間栄喜ノートをもとにして(その2)ー」『沖縄県立博物館紀要第5号』沖縄県立博物館 1979年
- 注18) 宝玲叢刊第5集『琉球風俗絵図』本邦書籍(株) 1982年
- 注19) 鎌倉芳太郎「工芸 染織Ⅰ」沖縄県立芸術大学 (p209)
- 注20) 国宝「江戸立付献上物進上物万総帳扣」(1858年か／那覇市蔵)
- 注21) 「美術工芸資料目録」『久米島総合調査報告書』沖縄県立博物館 1994年
- 注22) 『東京国立博物館図版目録 琉球資料編』東京国立博物館 2002年

- 注23) 『重要文化財指定記念 尚家継承美術工芸—琉球王家の美—』那覇市 2002年
- 注24) 『琉球王朝の華—美・技・芸—』(財)沖縄海洋博覧会記念公園管理財団 2002年
- 注25) 『「包むころ ふろしき」展図録』毎日新聞社1997年
- 注26) 『那覇市歴史博物館開館1周年記念 おしゃれ・モダン王国の技—那覇士族「貝氏」福地家伝世品—』那覇市歴史博物館 平成19年

所蔵品一覧 凡例

- 掲載する資料は沖縄県立博物館・美術館に収蔵されている風呂敷の用途に使われた方形布帛である。別用途の方形布帛は除いた。
- 資料名称は、収蔵品原簿に記載されている通りにした。
- 寸法は布帛の縦×横で、単位は°。最大と最小二つを採寸した。
- 仕立は、下記のとおりに分類し、表においては番号で示した。
 - ① 表：並縫いの糸目が一列、裏：並縫いの糸目が二列
 - ② 表：並縫いの糸目が2列、裏：並縫いの糸目が二列
 - ③ かがりによるもの
 - ④ 裏の縫い代を綴じないもの
- 織り密度は、1cm間の経糸×緯糸の本数である。

博物館所蔵資料一覧

1 黄色地松竹梅文様紅型風呂敷



資 料 №: 220
寸法(縦×横) 86.0×88.5/97.6×94.8
布 巾: 94.8
剥ぎ枚数 : 1枚
仕立て : 一
素 材: 木綿(平織)
織り密度 : 24×24
技 法: 筒描き
地 色: 黄
模 様: 松竹梅
紋の模様 : 一
受 入 年: 1951
受入次第 : 寄贈
備 考: 片面染/布の四つ端を紐で縛り、張った跡がある。
布は小麦粉の袋を再利用したものか。
城間榮喜氏が戦後染めたものと思われる。

2 紺地松竹梅鶴亀文様紅型風呂敷



資 料 №: 258
寸法(縦×横) 108.0×108.5/117.0×115.0
布 巾: 38.2
剥ぎ枚数 : 3枚
仕立て : ①
素 材: 苧麻
織り密度 : 20×12-13
技 法: 筒描き
地 色: 紺
模 様: 松竹梅 鶴亀
紋の模様 : 鶴亀
受 入 年: 1951
受入次第 : 購入(八重山にて)
備 考: 両面染
鶴亀の紋も筒描き

3 藍型鶴亀松竹梅模様紅型風呂敷(大)



資 料 №: 404
寸法(縦×横) 150.8×141.5/163.2×147.0
布 巾: 49.0
剥ぎ枚数 : 3枚
仕立て : ①
素 材: 苧麻
織り密度 : 12×12
技 法: 筒描き・型染
地 色: 紺
模 様: 松竹梅 鶴亀
紋の模様 : 鶴亀/丸に「チ」文字/丸に「ヨ」文字
受 入 年: 1951
受入次第 : 購入(八重山にて)
備 考: 両面染・藍型/布の四つ端に紐が付いており、壁等に張り、幕の代わりに使用した可能性あり。
「チ」「ヨ」は筒描きに見えるが、型染と思われる。

4 紺地松竹梅模様紅型風呂敷(中)



資 料 №: 405
寸法(縦×横) 110.0×107.0/118.5×111.3
布 巾: 35.5/38.5
剥ぎ枚数 : 3枚
仕立て : ①
素 材: 苧麻
織り密度 : 14×11
技 法: 筒描き・型染
地 色: 紺
模 様: 松竹梅 紋
紋の模様 : 丸に鉄砲角に十字
受 入 年: 1951
受入次第 : 購入(八重山にて)
備 考: 両面染

5 紺地家紋入り松竹梅文様紅型風呂敷(小)



資 料 №: 407
寸法(縦×横) 111.0×112.0
布 巾: 38.0/40.2
剥ぎ枚数 : 3枚
仕立て : ①
素 材: 苧麻
織り密度 : 18×12
技 法: 筒描き・型染
地 色: 紺
模 様: 松竹梅 紋
紋の模様 : 丸に「ヤ」文字
受 入 年: 1952
受入次第 : 購入(八重山にて)
備 考: 両面染

6 紺地牡丹模様紅型風呂敷



資 料 №: 474
寸法(縦×横) 87.0×96.0
布 巾: 51.5
剥ぎ枚数 : 2枚
仕立て : ①
素 材: 苧麻
織り密度 : 12×10
技 法: 筒描き・型染
地 色: 紺
模 様: 牡丹唐草 紋
紋の模様 : 丸に釣り二つ引き
受 入 年: 1952
受入次第 : 寄贈
備 考: 両面染

7 紺地牡丹模様紅型風呂敷



資 料 №: 503
寸法(縦×横) 107.5×111.0/118.3×115.0
布 巾: 36.5/38.5
剥ぎ枚数 : 3枚
仕立て : ①
素 材: 苧麻
織り密度 : 12×9
技 法: 筒描き・型染
地 色: 紺
模 様: 牡丹
紋の模様 : 光琳六山輪に左三巴
受 入 年: 1953
受入次第 : 購入(那覇市首里)
備 考: 両面染
大里御殿の紋か

8 紺地牡丹模様紅型風呂敷



資 料 №: 504
寸法(縦×横) 195.2×200.0/195.0×208.0
布 巾: 50.7/52.0
剥ぎ枚数 : 4枚
仕立て : ①+④
素 材: 苧麻
織り密度 : 10×6
技 法: 筒描き・型染
地 色: 紺
模 様: 牡丹
紋の模様 : 一星に一文字
受 入 年: 1953
受入次第 : 購入(那覇市首里)
備 考: 両面染
「八重山」「高志武」の記銘あり/紋や銘は筒描きにみえるが、型染と思われる。

9 紺地三ツ巴松竹梅模様紅型風呂敷



資 料 №: 507
寸法(縦×横) 146.5×144.0/158.0×156.5
布 巾: 48.5/52.5
剥ぎ枚数 : 3枚
仕立て : ①
素 材: 苧麻
織り密度 : 15×9
技 法: 筒描き・型染
地 色: 紺
模 様: 松竹梅 紋
紋の模様 : 太丸に左三ツ巴
受 入 年: 1953
受入次第 : 購入(那覇市首里)
備 考: 両面染

10 紺地二ツ巴紋桜文様紅型風呂敷



資 料 №: 512
寸法(縦×横) 143.3×139.5/150.0×150.5
布 巾: 47.3/50.5
剥ぎ枚数 : 3枚
仕立て : ①
素 材: 苧麻
織り密度 : 16×14-15
技 法: 筒描き・型染
地 色: 紺
模 様: 桜 紋
紋の模様 : 右二ツ巴
受 入 年: 1953
受入次第 : 購入(那覇市首里)
備 考: 両面染
旧台帳には松竹梅と書かれているが桜模様

11 紺地牡丹模様紅型風呂敷



資 料 №：513
寸法(縦×横)130.0×141.5/139.2×151.5
布 巾：46.7/50.5
剥ぎ枚数：3枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：12×10
技 法：筒描き
地 色：紺
模 様：松竹梅
紋の模様：一
受 入 年：1953
受入次第：購入(那覇市首里)
備 考：両面染

12 紺地鶴亀松竹梅文様紅型風呂敷



資 料 №：514
寸法(縦×横)149.0×151.5/157.5×153.5
布 巾：51.5
剥ぎ枚数：3枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：12×9
技 法：筒描き・型染
地 色：紺
模 様：牡丹唐草 紋
紋の模様：七つ星結び
受 入 年：1953
受入次第：購入(那覇市首里)
備 考：両面染/縫い直し跡あり。紋は「梅鉢文」に似ているが花の数が多い。/中心部分は、表、裏両面から、藍を染め足した痕跡がある。紋を消したものか。

13 紺地鶴亀松竹梅文様紅型風呂敷



資 料 №：515
寸法(縦×横)76.0×73.5/80.5×76.0
布 巾：37.7/38.3
剥ぎ枚数：2枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：18×13
技 法：筒描き・型染
地 色：紺
模 様：松竹梅 鶴亀
紋の模様：鶴亀
受 入 年：1953
受入次第：購入(那覇市首里)
備 考：両面染
「スーデーク宮城」の記録あり(筒描き)

14 紺地松竹梅模様紅型風呂敷



資 料 №：516
寸法(縦×横)93.6×86.5/100.7×100.4
布 巾：50.5
剥ぎ枚数：2枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：12×11
技 法：筒描き
地 色：紺
模 様：松竹梅
紋の模様：一
受 入 年：1953
受入次第：購入(那覇市首里)
備 考：両面染

15 紺地松竹梅模様紅型風呂敷



資 料 №：517
寸法(縦×横)94.0×86.5/94.8×100.7
布 巾：48.7/50.3
剥ぎ枚数：2枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：12×10
技 法：筒描き・型染
地 色：紺
模 様：松竹梅 紋
紋の模様：左一ツ巴に一つ引き
受 入 年：1953
受入次第：購入(那覇市首里)
備 考：両面染

16 紺地菊模様紅型風呂敷



資 料 №：898
寸法(縦×横)90.5×95.5
布 巾：95.5
剥ぎ枚数：1枚
仕立て：一
素 材：木綿
織り密度：32×30
技 法：筒描き
地 色：紺
模 様：菊
紋の模様：一
受 入 年：1953
受入次第：寄贈(東恩納博物館)
備 考：両面染

17 紺地菖蒲模様紅型風呂敷



資 料 №：1578
寸法(縦×横)103.0×94.0/113.0×113.0
布 巾：47.5
剥ぎ枚数：2枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：10×9
技 法：筒描き・型染
地 色：紺
模 様：菖蒲 紋
紋の模様：四方形に縦二引き
受 入 年：1955
受入次第：購入(京都より)
備 考：両面染
縫い糸は青い苧麻糸。筒引きの後で解いて染め、その後仕立てられている。

18 紺地菊模様紅型風呂敷



資 料 №：1597
寸法(縦×横)154.8×150.0/160.0×161.5
布 巾：36.8/41.0
剥ぎ枚数：4枚
仕立て：①+④
素 材：苧麻
織り密度：18×13
技 法：筒描き
地 色：紺
模 様：菊
紋の模様：一
受 入 年：1955
受入次第：購入(東京)
備 考：両面染/解いて、木綿糸で縫い直し、さらに布の上に棒が通る所を作り、壁掛け等として使用した様子がみられる。

19 紺地牡丹左巴紋紅型風呂敷



資 料 №：1886
寸法(縦×横)103.0×102.5/105.0×106.0
布 巾：50.5/53.5
剥ぎ枚数：2枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：16×12
技 法：筒描き・型染
地 色：紺
模 様：牡丹唐草 紋
紋の模様：左三ツ巴
受 入 年：1959
受入次第：購入(東京より)
備 考：両面染

20 紺地菖蒲模様紅型風呂敷



資 料 №：1887
寸法(縦×横)150.5×139.5/156.5×152.5
布 巾：47.0/51.5
剥ぎ枚数：3枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：10×12
技 法：筒描き
地 色：紺
模 様：菖蒲
紋の模様：一
受 入 年：1959
受入次第：購入(東京より)
備 考：両面染

21 紺地三つ巴紋梅文様紅型風呂敷



資 料 №：1888
寸法(縦×横)146.3×149.0/153.0×155.6
布 巾：75.3/78.5
剥ぎ枚数：2枚
仕立て：①
素 材：木綿
織り密度：26×24
技 法：筒描き・型染
地 色：青
模 様：梅 紋
紋の模様：左三ツ巴
受 入 年：1959
受入次第：購入（東京より）
備 考：両面染
地色は、紺より青に近い

22 藍型牡丹模様紅型風呂敷



資 料 №：1916
寸法(縦×横)90.0×78.5/95.3×89.2
布 巾：26.5/29.8
剥ぎ枚数：3枚
仕立て：③
素 材：苧麻
織り密度：14×7
技 法：筒描き
地 色：
模 様：牡丹唐草
紋の模様：一
受 入 年：1959
受入次第：購入（東京より）
備 考：両面染
隈取り無し 素材硬く荒い、
縫り継ぎあり

23 紺地松竹梅模様紅型風呂敷



資 料 №：1917
寸法(縦×横)82.5×98.0/103.6×84.7
布 巾：41.5/42.5
剥ぎ枚数：2枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：14×14
技 法：筒描き
地 色：紺
模 様：松竹梅
紋の模様：一
受 入 年：1959
受入次第：購入（東京より）
備 考：両面染
三枚剥ぎであったものを中の布を除いて、二枚を繋いでいるため、模様がずれている。

24 紺地鶴亀松竹梅模様紅型風呂敷



資 料 №：1918
寸法(縦×横)77.5×78.0/81.5×80.0
布 巾：36.9/40.5
剥ぎ枚数：2枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：12×13
技 法：筒描き・型染
地 色：紺
模 様：松竹梅 鶴亀
紋の模様：鶴亀
受 入 年：1959
受入次第：購入（東京より）
備 考：両面染
経糸殆ど燃るり無し。

25 藍型松竹梅模様紅型風呂敷



資 料 №：1919
寸法(縦×横)83.5×95.0/84.0×98.5
布 巾：33.3
剥ぎ枚数：3枚
仕立て：④
素 材：木綿
織り密度：16×12
技 法：筒描き
地 色：紺
模 様：松竹梅
紋の模様：一
受 入 年：1959
受入次第：購入（東京より）
備 考：両面染
布はガーゼのように柔らかい

26 紺地松竹梅模様紅型風呂敷



資 料 №：1920
寸法(縦×横)96.5×99.0/102.0×95.5
布 巾：36.0
剥ぎ枚数：3枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：16×11
技 法：筒描き
地 色：紺
模 様：松竹梅
紋の模様：一
受 入 年：1959
受入次第：購入（東京より）
備 考：両面染

27 紺地牡丹模様紅型風呂敷



資 料 №：1921
寸法(縦×横)107.0×115.0/116.9×117.8
布 巾：40.3/41.0
剥ぎ枚数：3枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：22×14
技 法：筒描き
地 色：紺
模 様：牡丹唐草 結び紐
紋の模様：一
受 入 年：1959
受入次第：購入（東京より）
備 考：両面染

28 紺地鶴亀松竹梅模様紅型風呂敷



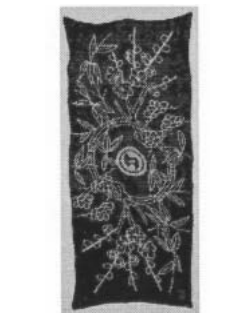
資 料 №：1922
寸法(縦×横)156.0×153.0/164.0×160.5
布 巾：52.0/53.5
剥ぎ枚数：3枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：10×10
技 法：筒描き・型染
地 色：紺
模 様：松竹梅 鶴亀
紋の模様：丸に鶴亀
受 入 年：1959
受入次第：購入（東京より）
備 考：両面染
地色は黒に近い。

29 緑地花鳥模様紅型染風呂敷



資 料 №：1923
寸法(縦×横)137.0×143.0/138.0×142.0
布 巾：36.0
剥ぎ枚数：4枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：12×9
技 法：型染
地 色：緑
模 様：流水 牡丹 菊 河骨
紋の模様：一
受 入 年：1959
受入次第：購入（東京より）
備 考：片面染
縫い糸は黒

30 藍型松竹梅巴模様紅型チリデーウサヤー



資 料 №：1924
寸法(縦×横)117.0×49.0
布 巾：49.0
剥ぎ枚数：1枚
仕立て：一
素 材：苧麻
織り密度：12×8
技 法：筒描き・型染
地 色：紺
模 様：松竹梅 紋
紋の模様：丸に右二ツ巴に一ツ引き
受 入 年：1959
受入次第：購入（東京より）
備 考：両面染
チリデー（盆）に掛けるもの

31 紺地牡丹模様紅型風呂敷



資 料 №：1925
寸法(縦×横)100.0×101.8/105.0×101.5
布 巾：52.0
剥ぎ枚数：2枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：12×9
技 法：筒描き・型染
地 色：紺
模 様：牡丹唐草 紋
紋の模様：左三ツ巴
受 入 年：1959
受入次第：購入（東京より）
備 考：両面染
中心部分は、表、裏両面から、藍を染め足した痕跡がある。紋を消したもののか。

32 紺地牡丹文様紅型風呂敷



資 料 №：1926
寸法(縦×横)169.5×152.5/174.0×163.5
布 巾：39.5
剥ぎ枚数：4枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：12×9～10
技 法：筒描き
地 色：紺
模 様：牡丹唐草
紋の模様：一
受 入 年：1959
受入次第：購入（東京より）
備 考：両面染

33 黄色地牡丹模様紅型風呂敷



資 料 №：4342
寸法(縦×横)174.0×169.8/185.0×187.5
布 巾：37.5
剥ぎ枚数：5枚
仕立て：③
素 材：芭蕉
織り密度：20×15
技 法：筒描き
地 色：黄
模 様：牡丹唐草
紋の模様：一
受 入 年：1975
受入次第：購入（城間榮喜）
備 考：両面染
城間榮喜作

34 黄色地松竹梅鶴亀模様紅型風呂敷



資 料 №：4496
寸法(縦×横)174.3×184.2/181.5×188.7
布 巾：38.0
剥ぎ枚数：5枚
仕立て：②
素 材：木綿・苧麻
織り密度：22×13
技 法：筒描き・型染・墨入れ
地 色：黄
模 様：松竹梅 鶴亀
紋の模様：丸に鶴亀
受 入 年：1976
受入次第：購入（知念積弘）
備 考：両面染
知念積弘作/鶴亀の紋は型染ではなく、筒描き/縫い方は並縫いではなく、かがり縫い。

35 紺地牡丹模様藍型風呂敷



資 料 №：4656
寸法(縦×横)141.3×137.3/145.5×151.3
布 巾：35.2/38.0
剥ぎ枚数：4枚
仕立て：②
素 材：苧麻
織り密度：12×11
技 法：筒描き
地 色：紺
模 様：牡丹唐草
紋の模様：一
受 入 年：1977
受入次第：購入（城間榮喜）
備 考：両面染
城間榮喜作

36 紺地菖蒲鶯模様藍型風呂敷



資 料 №：4667
寸法(縦×横)140.5×137.2/146.5×146.5
布 巾：35.2/36.5
剥ぎ枚数：4枚
仕立て：②
素 材：苧麻
織り密度：12×11
技 法：筒描き
地 色：紺
模 様：菖蒲 鶯
紋の模様：一
受 入 年：1977
受入次第：購入（城間榮喜）
備 考：両面染
城間榮喜作

37 藍型裂地



資 料 №：6276
寸法(縦×横)131.0×116.0/134.0×119.0
布 巾：40
剥ぎ枚数：3枚
仕立て：④
素 材：苧麻
織り密度：24×24
技 法：型染
地 色：白
模 様：鳳凰 牡丹 藤 桜
紋の模様：一
受 入 年：1980
受入次第：寄贈（滋賀県より）
備 考：両面染
尚家旧藏品/着物を解き、包み物として使用したと思われる

38 松竹梅鶴亀文様紅型風呂敷



資 料 №：7103
寸法(縦×横)153.2×148.8/161.5×158.0
布 巾：75.3/79.8
剥ぎ枚数：2枚
仕立て：①
素 材：木綿
織り密度：22×22
技 法：筒描き・型染
地 色：紺
模 様：松竹梅 鶴亀
紋の模様：鶴亀
受 入 年：1981
受入次第：購入
備 考：両面染

39 丸に菱巴牡丹文様風呂敷



資 料 №：8909
寸法(縦×横)149.0×143.9/153.8×150.8
布 巾：48.5/51.0
剥ぎ枚数：3枚
仕立て：①
素 材：苧麻
織り密度：12×12
技 法：筒描き・型染
地 色：紺
模 様：牡丹唐草 紋
紋の模様：子持ち丸に隅立て角に右三ツ巴
受 入 年：1983
受入次第：購入（那覇市より）
備 考：両面染
義村御殿の紋か

40 紺地曲り金に川の字紋松竹梅文様紅型風呂敷



資 料 №：8910
寸法(縦×横)112.0×105.0/115.8×110.7
布 巾：51.5
剥ぎ枚数：2枚
仕立て：②
素 材：苧麻
織り密度：12×9
技 法：筒描き・型染
地 色：紺
模 様：松竹梅 紋
紋の模様：曲尺に「川」字
受 入 年：1983
受入次第：購入（那覇市より）
備 考：両面染
制作は大正、昭和期か

41 麻紺地松竹梅文様紅型風呂敷



資 料 №: 13127
寸法(縦×横) 86.0×87.5/90.5×95.0
布 巾: 45.0/47.0
剥ぎ枚数 : 2枚
仕立て : ①
素 材: 苧麻
織り密度 : 12×16
技 法: 筒描き
地 色: 紺
模 様: 松竹梅
紋の模様 : 一
受 入 年: 1988
受入次第 : 寄贈(那覇市より)
備 考: 両面染
ブラジルへの移民一世が嫁入りに持参したもの

42 麻紺地竹梅に鶴亀文様紅型風呂敷



資 料 №: 13128
寸法(縦×横) 約96.0×108.5
布 巾: 48.0
剥ぎ枚数 : 3枚
仕立て : ①か
素 材: 苧麻
織り密度 : 20×13
技 法: 筒描き・型染
地 色: 紺
模 様: 松竹梅 鶴亀
紋の模様 : 鶴亀
受 入 年: 1988
受入次第 : 寄贈(那覇市より)
備 考: 両面染
ブラジルへの移民一世が嫁入りに持参したもの/6枚に裁断され、左下が欠損している

43 木綿黄色地牡丹文様紅型風呂敷



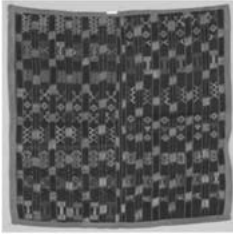
資 料 №: 14108
寸法(縦×横) 97.0×86.5/101.7×93.5
布 巾: 86.5/93.5
剥ぎ枚数 : 1枚
仕立て : 一
素 材: 木綿
織り密度 : 20×20
技 法: 筒描き
地 色: 黄
模 様: 牡丹唐草
紋の模様 : 一
受 入 年: 1994
受入次第 : 寄贈(京都より)
備 考: 両面染
布は小麦粉の袋を使用 戦後制作されたもの/布の四つ端を紐で縛り、張った跡がある。

44 木綿黄色地松竹梅文様紅型風呂敷



資 料 №: 14109
寸法(縦×横) 95.0×87.5
布 巾: 87.5/100.5
剥ぎ枚数 : 1枚
仕立て : 一
素 材: 木綿
織り密度 : 20×20
技 法: 筒描き
地 色: 黄
模 様: 松竹梅
紋の模様 : 一
受 入 年: 1994
受入次第 : 寄贈(京都より)
備 考: 両面染
布は小麦粉の袋を使用 戦後制作されたもの/布の四つ端を紐で縛り、張った跡がある。

45 木綿紺地格子に緋花織頭巾



資 料 №: 14138
寸法(縦×横) 69.0×73.0
布 巾: 37
剥ぎ枚数 : 2枚
仕立て : ④
素 材: 木綿 羊毛
織り密度 : 20×13
技 法: 手花織(縫取織)
地 色: 紺
模 様: 格子縞 花織模様
紋の模様 : 一
受 入 年: 1994
受入次第 : 寄贈(沖縄市より)
備 考: 両面染
1898(明治31)年、兼島ムト製作。祭りの頭巾として使用

46 苧麻紺地紋入鶴亀松竹梅文様風呂敷



資 料 №: 15906
寸法(縦×横) 96.5×98.8/93.2×101.0
布 巾: 49.3
剥ぎ枚数 : 2枚
仕立て : ①
素 材: 苧麻
織り密度 : 12×12
技 法: 筒描き・型染
地 色: 紺
模 様: 松竹梅 鶴亀 紋
紋の模様 : 鶴亀/丸に四つ斧
受 入 年: 1997
受入次第 : 寄贈(大阪より)
備 考: 両面染/樋口富麻呂(画家)が戦前に収集/布の左下に紋付けされており、包むことを意識した模様構成。

47 木綿紺地松竹梅文様風呂敷



資 料 №: 15907
寸法(縦×横) 103.0×109.0/108.6×112.9
布 巾: 77
剥ぎ枚数 : 1.5枚
仕立て : ①
素 材: 木綿
織り密度 : 20×18
技 法: 筒描き
地 色: 紺
模 様: 松竹梅
紋の模様 : 一
受 入 年: 1997
受入次第 : 寄贈(大阪より)
両面染/樋口富麻呂(画家)が戦前に収集/布4枚で、基布を仕立てる。

48 苧麻紺地熨斗に菊文様風呂敷



資 料 №: 15908
寸法(縦×横) 143.5×144.7/152.2×148.2
布 巾: 50
剥ぎ枚数 : 3枚
仕立て : ①
素 材: 苧麻
織り密度 : 12×9
技 法: 筒描き
地 色: 紺
模 様: 菊 熨斗
紋の模様 : 一
受 入 年: 1997
受入次第 : 寄贈(大阪より)
備 考: 両面染/樋口富麻呂(画家)が戦前に収集/縫い直しの跡あり(黒い糸)。

49 苧麻紺地紋入松竹梅文様布地(チリデーウサー)



資 料 №: 15909
寸法(縦×横) 78.9×48
布 巾: 48.0/51.0
剥ぎ枚数 : 1枚
仕立て : 一
素 材: 苧麻
織り密度 : 12×10
技 法: 筒描き・型染
地 色: 紺
模 様: 松竹梅 紋
紋の模様 : 丸に「に」字
受 入 年: 1997
受入次第 : 寄贈(大阪より)
備 考: 両面染/樋口富麻呂(画家)が戦前に収集/

50 松竹梅模様紅型風呂敷(麻黄地)



資 料 №: 16751
寸法(縦×横) 135.0×144.0/142.5×151.0
布 巾: 36.0/37.5
剥ぎ枚数 : 4枚
仕立て : ③
素 材: 苧麻
織り密度 : 12×10
技 法: 筒描き
地 色: 黄
模 様: 松竹梅
紋の模様 : 一
受 入 年: 2000
受入次第 : 移管(沖縄県文化環境部)
備 考: 両面染
旧沖縄館資料/城間榮喜作

51 牡丹唐草紅型風呂敷(紺地)



資 料 No: 16752
 寸法(縦×横)134.0×142.0/140.5×149.2
 布 巾: 35.5/37.3
 剥ぎ枚数: 4枚
 仕立て: ③
 素 材: 苧麻
 織り密度: 12×12
 技 法: 筒描き
 地 色: 紺
 模 様: 牡丹唐草
 紋の模様: 一
 受 入 年: 2000
 受入次第: 移管 (沖縄県文化環境部)
 備 考: 両面染
 旧沖縄館資料/城間榮喜作

52 浅地紅型風呂敷



資 料 No: SE012
 寸法(縦×横)115.7×117.5
 布 巾: 40
 剥ぎ枚数: 3枚
 仕立て: ①
 素 材: 絹 (花紗綾)
 織り密度: 60×35
 技 法: 筒描き
 地 色: 水色
 模 様: 鉄線唐草
 紋の模様: 一
 受 入 年: 不明
 受入次第: 学芸資料
 備 考: 両面染
 補修の跡あり (紫、水色の糸)

53 浅地紅型風呂敷



資 料 No: SE080
 寸法(縦×横)194.5×102.5
 布 巾: 37.5
 剥ぎ枚数: 3枚
 仕立て: ④
 素 材: 木綿
 織り密度: 28×22
 技 法: 型染
 地 色: 水色
 模 様: 岩 楼閣 波 牡丹 獅子
 紋の模様: 一
 受 入 年: 不明
 受入次第: 学芸資料
 備 考: 片面染
 型染の布を再利用して包み物或いは掛け物として使用していたものと思われる。